【四月の言葉（令和三年）】

人間の最大の死因は
〝生まれた〟ことなのです

「結果には必ず原因がある」この世のすべての事柄は、原因と結果との複雑な関わりによって成り立っていると説く仏教の縁起観は、科学的整合性にも矛盾がありません。

がんの告知を受ければ、多くの人間は「死の宣告を受けた」と絶望を感じるでしょう。しかし、考えてみれば、人間は誰もが生まれた瞬間に「死の宣告を受けている」ようなものです。そのことを忘れて日々を過ごしている私たちです。

いつ、どこで、どのような状況で自分が死を迎えるのか、誰にもわかりません。しかし、死ぬ「時・場所」は決まっていませんが、死ぬ「こと」は決定済みです。

病気や事故など、死の『縁』ばかりを問題にしがちな私たちですが、改めて死の因に目を向けたいものです。

灯ったロウソクは必ず消えます。途中で消えるか、燃え尽きて消えるかの違いがあるだけです。残りの時間を心配するよりも、ただ「いま」「ここ」を生きるしかないのです。

（吉村隆真著「心の読み薬」参照）